

2014年度  
事業計画書

2014年4月 1日から  
2015年3月31日まで

公益財団法人 国際文化会館

## 知的対話プログラム

21世紀に入り、より複雑化してきた諸課題を見据え、異なる文化・社会的背景や研究者、ジャーナリスト、NGO/NPOのリーダー、作家、芸術家といった細分化された専門を超え、人文・社会・自然科学の諸分野をつなぐような思索と対話の場を創出し、領域横断的かつ複眼的、重層的な知的ネットワークの形成を図る。

### 1. アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム (ALFP)

会館の事業の中心に位置するプログラムの一つであるALFPは、1996年度より独立行政法人国際交流基金との共催により、これまで102名のアジア諸国のさまざまな分野で活躍する知識人を招聘してきた。滞日中のフェローたちは、会館で寝食を共にし、アジア地域や世界に共通する諸課題について議論する知的共同作業に参加する。このような知的対話を通じて、地域内ならびにトランスナショナルな理解と協力を促進し、アジアのパブリック・インテレクチュアルおよび日本のカウンターパートとの緊密なネットワーク構築をめざす。

2014年度も、7名のフェローをアジア数カ国から招聘する予定である。

### 2. 牛場記念フェローシップ

現代の複雑化した国際情勢を読み解き、時代の一步先を見据える世界的なオピニオン・リーダーを招聘し、グローバル社会が直面する諸課題について意見交換を行うことにより、日本と諸外国との相互理解の増進を試みる。滞日中のフェローは、公開講演会と専門家を中心としたセミナー、ワークショップなどに講師として参加するほか、各フェローの希望に応じて非公式な対談やディスカッションの機会を設定する。

2009年度を最後にフェローの選出が行われていなかったが、2014年度より、新たな枠組みで年間1～2名ずつフェローを招聘する予定である。

本フェローシップは、牛場信彦記念財団の残余財産の寄贈により実施している。

### 3. 日印対話事業 (Japan-India Distinguished Visitors Program)

日印平和条約の締結から60周年を迎えた2012年に、会館と独立行政法人国際交流基金は、日印両国が主軸となり、アジア・太平洋の安定と平和を築くための対話の「場」を創出するため、新たな人物招聘事業“Japan-India Distinguished Visitors Program”を立ち上げた。

本プログラムでは、社会のさまざまな問題の解決に向けて、現状を打破するための新しい価値やアイデアを提案している、インド国内で影響力のある人物を、政治・経済・文化・学術・科学など幅広い分野から、年間1～2名、一週間程度日本に招聘する。フェローは、講演会、関連機関の訪問などを通して日本の関係者と意見交換やネットワーク構築を行う。

2014年度も、1～2名のフェローを招聘する予定である。

### 4. 日米国際金融シンポジウム

ハーバード・ロースクール国際金融システム・プログラム(PIFS)との共催により、日米国際金融シンポジウム「21世紀金融システムの構築：日本と米国にとっての課題」を開催している。本シンポジウムは毎年日米交互で開催され、日米両国の政府高官、政治家、金融機関幹部、シンクタンク研究者、法律家、コンサルタント、研究者、メディア代表者など120名以上が参加して、2日間にわたって国際金融システムの機

能と安定化にかかわる問題についてオフレコの討議を行う。

2014年度は、10月24～26日に軽井沢で第17回目となるシンポジウムを開催する予定である。

## I. 人材育成プログラム

創造的な知的対話を行うためには、自己の社会や文化の基盤の上に立ち、広く総合的な視野を身につけた主体的な対話能力を持つ人材が必要である。こうした人材の発掘と育成に資する、効果的で地道なプログラムを行う。

### 1. 新渡戸国際塾

企業、非営利団体、官公庁、研究機関などの若手社会人を対象に、国内外の国際的な現場で活躍できる人材の育成を目的に開催され、2013年12月に第六期を終了した。塾長は明石康(国際文化会館 理事長)、コーディネーターには渡辺靖氏(慶應義塾大学 SFC 教授)を迎え、第七期は2014年6月から12月まで、全14回の講義を行い、そのうち7回は公開講演とする予定である。本塾は主として週末に開催され、各回の構成は、講義と質疑応答(90分)ならびに講師と塾生との自由討論(140分)となっている。15名の塾生は、書類選考(願書・小論文)および面接により選考される。

本プログラムは、公益財団法人渋沢栄一記念財団、一般財団法人MRAハウスの助成を受けて実施する予定である。

### 2. 日米芸術家交換プログラム(日米友好基金 ほか)

米国の芸術家5名が来日して、日本文化・芸術の研究および創作活動に従事し、また日本の芸術家との交流を深めるプログラムであり、全米芸術基金(US National Endowment for the Arts)、文化庁の協力のもと、日米友好基金(Japan-United States Friendship Commission)によって主催されている。文化庁からはビザ取得に関する協力を受け、会館では1978年のプログラム開始時より、来日時のオリエンテーションや住居の手配、日本人芸術家や関連団体などへの紹介、情報の提供や通訳など、滞日中の活動全般にわたるサポートを行っている。

2014年度は、以下の5名のアーティストが選出された。フェローの活動や日本人芸術家とのコラボレーションの発表は、IHJアーティスト・フォーラム(助成:日米友好基金)として開催する予定である。

パトリック・ドネリー Patrick Donnelly (作家)

パッティ・ジョー(PJ)・ヒラバヤシ Patti Jo (PJ) Hirabayashi (和太鼓奏者)

アキム・ヌドゥロブ Akim Ndlovu (マルチ・ディシプリナリー・アーティスト)

ミナ・テレサ・ソン Mina Teresa Son (映画監督、メディア・アーティスト)

ハンズ・トゥチュク Hans Tutschku (作曲家)

## II. パブリックプログラムならびに出版

知的交流の成果を広く一般に共有し、国際理解を進める基盤を強化するため、さまざまな形のパブリックプログラムの開催や、出版を含めた情報の発信を行う。

### 1. アイハウス・パブリック・プログラム

(1) アイハウス・ランチタイム・レクチャー

広く一般の方々を対象として、第一線で活躍中のさまざまな分野の専門家を招き、タイムリーなテーマについて解説していただく内容の講演会を開催している。

2014年度も、4～5回の講演会を開催する予定である。

(2) japan@ihj

「日本理解の増進」を共通項に、情報交換・発信および国境・職業・分野を超えた相互交流の場となるフォーラムで、会館がこれまで築いてきた、アカデミズム、ジャーナリズム、アート、ビジネスなどにおける内外の専門家の協力をもとに実施している。いずれの講演も、基本的には通訳をつけずに英語で行うことが特徴となっている。

2014年度も、4～6回の講演会を開催する予定である。

(3) 東京国際文芸フェスティバル

日本をニューヨーク、ロンドン、パリと並ぶ世界の文芸の拠点のひとつとして位置づけるため、公益財団法人日本財団の READ JAPAN プロジェクトは、海外の作家や作品を日本国内に紹介するとともに、文芸拠点としての日本の文学・文化を世界にアピールするショーケースとして、また、日本と世界の出版・文芸業界の橋渡し役としての文芸フェスティバルを 2012 年度から開催している。

会館は、本フェスティバルの中で行われる日本理解の促進など、会館のミッションに合致するテーマのプログラムの開催に協力をしている。2014 年度も前年度同様、日本財団と一部のセッションを共催する予定である。

(4) IHJコンサート

滞日中の留学生や外国人に、質の高い日本の文化芸術を体験する機会を提供するため、秋季に岩崎小彌太ホールもしくは庭園を使って、伝統音楽・芸能のコンサートを行う。

(5) 日文研—アイハウス・フォーラム(仮称)(新規)

京都を拠点に、日本の文化・歴史を国際的な連携・協力の下で研究するとともに、外国の日本研究者を支援している国際日本文化研究センター(日文研)との共同プログラムを新たに立ち上げる。年4回程度、日文研の専任・客員研究員を講師とした講演会やセミナー(用語は日本語または英語)を会館で実施する他、会館が海外からフェローを招聘した場合には、日文研との共催で京都での講演会を実施する。共同プログラムを通じて、関西圏における会館の知名度を高め、首都圏における日文研の知名度を高めることも目指す。

2014年度は、9月から3回程度共同プログラムを実施する予定である。講師は日本人、外国人をバランスよく配す予定である。

(6) その他

時宜を得たテーマを扱ったパネル・ディスカッションや、海外からの来日が急遽決まった知識人による講演会などを随時開催する。4月下旬もしくは5月に、日本の「近隣外交」をテーマとしたパネル・ディスカッションを開催する予定である。

## 2. 出版

### (1) 公益信託長銀国際ライブラリー

2000年7月に設定された、「公益信託長銀国際ライブラリー基金」(前身である長銀国際ライブラリー財団の残余財産を基金として事業を継承)による事業である。政治・経済・社会・文化などの日本人著作を毎年2冊選定し、英訳・刊行して広く内外に配布し、国際社会の中での日本理解の増進に資することを目的としている。

2014年度は、以下の英語翻訳版を刊行し、内外の大学図書館、研究機関、公共図書館、文化施設など、海外2,800カ所、国内700カ所への無償配布の実施を予定している。

三浦展著『第四の消費: つながりを生み出す社会へ』(朝日新聞出版、2012年刊)

*Japan's Fourth-Stage Consumerism: The Coming Connection Society (tentative) by Miura Atsushi*

翻訳者: Dana Lewis

今橋理子著『秋田蘭画の近代: 小田野直武「不忍池図」を読む』(東京大学出版会、2009年刊)

*A New Reading of Odano Naotake's "Shinobazunoike-zu": The Akita Ranga School and the Cultural Context in Tokugawa Japan [tentative] by Imahashi Riko*

翻訳者: Ruth S. McCreery

また2014年度の英語翻訳対象として選定された、以下の2冊の翻訳を行う。

小倉和夫著『日本のアジア外交: 二千年の系譜』(藤原書店、2013年刊)

*Japan's Asian Diplomacy: The Legacy of Two Millennia (tentative) by Ogoura Kazuo*

翻訳者: David Noble

樋口和憲著『笑いの日本文化: 「烏滸」の者はどこへきえたのか?』(東海教育研究所、2013年刊)

*Laughter in Japanese Culture (tentative) by Higuchi Kazunori*

翻訳者: Jean Connell Hoff

### (2) アイハウス・プレス

2006年より、出版メディアを通して、会館のプログラム活動の成果を広く一般に発信するとともに、海外における日本理解の増進を目的として、日本人による名著を英訳・刊行して発信する活動を基本として実施している。

2014年度は、次の書籍を刊行し、内外の出版マーケットで有償配布する予定である。

川勝平太著 *Japan: The First Industrial Nation (tentative) by Kawakatsu Heita*

『日本文明と近代西洋: 「鎖国」再考』(日本放送出版協会、1991年刊)を基本に内容を改編して刊行。

翻訳者: Jean Connell Hoff

(注)本書は、旧長銀国際ライブラリー財団が刊行を決定し、著者との間に出版の合意がなされていたが、同財団の解散(2000年)に際して、同事業の継承先を国際文化会館に決定し、同事業の仕掛品であった本書の刊行・配布をその費用とともに、国際文化会館へ委託されたものである。

### (3) 定期・不定期刊行物

2013年度の事業内容をまとめた年次報告書(『国際文化会館の歩み』、Annual Report)を刊行し、会

員に送付する予定である。また 2014 年度は、今まで会員向けに発行していた『会報』『IHJ Bulletin』の内容を見直し、多くの人に会館をアピールするための新広報誌『I-House Quarterly』(A4 版、16 ページ)を年 4 回刊行する予定である。同誌には、開催された講演のサマリー、今後のプログラムの案内、施設の紹介などの情報を掲載し、会館を知らない若い世代にも気軽に足を運んでもらうべく内容の充実を図る。また、長文の講演録やプログラムの動画などは会館のホームページに掲載し、両媒体のすみわけを行う。

### III. 調査研究プロジェクト

#### 1. 外交問題夕食懇談会

毎回ゲストをお迎えし、外交問題に関心の深い方々にご参加いただき、よりインフォーマルな雰囲気の中で、オフレコでお話しいただく懇談会である。調査研究プロジェクトとして試験的に行い、得られた成果を他のプログラムの参考にするため、参加者は職種や専門を超えて、学者・研究者、外交実務経験者、NPO・シンクタンク関係者、メディア関係者、経済人など、異なる分野から少人数に限定している。使用言語は日本語または英語で、いずれも通訳はつけずに行う。

2014年度も、5～6回の実施を予定している。

#### 2. マンスフィールド財団との共催事業

会館は、2013年11月に米国のモーリーン・アンド・マイク・マンスフィールド財団との戦略的パートナーシップを提携した。2014年春には、同財団の東京事務所が会館内に移転される。2014年度からは、同財団との共催事業や協力事業を実施していく予定である。

### IV. 図書室

日本研究の専門図書室として、国内外の日本専門家と国際文化会館をつなぐ役割を担っている。

蔵書は日本に関する英文学術資料(主として人文・社会科学)、国際関係に関する専門資料、国際文化会館に関係する出版物など、書籍約 27,000 冊、雑誌約 430 タイトル、電子ジャーナル 18 タイトル、新聞 6 紙である。サービスは主に国際文化会館の会員、図書会員、宿泊者、他図書館からの紹介による利用者に対して行われている。サービス内容はレファレンス・サービス、レフェラル・サービス、資料貸出、他図書館との相互貸借および紹介状の発行などである。

2014年度は、上記の業務のほかに朗読会(年 3 回)と書籍小展示(年 2 回)を開催し、図書室を会員のみならず、広く一般に向けて広報する予定である。

以上